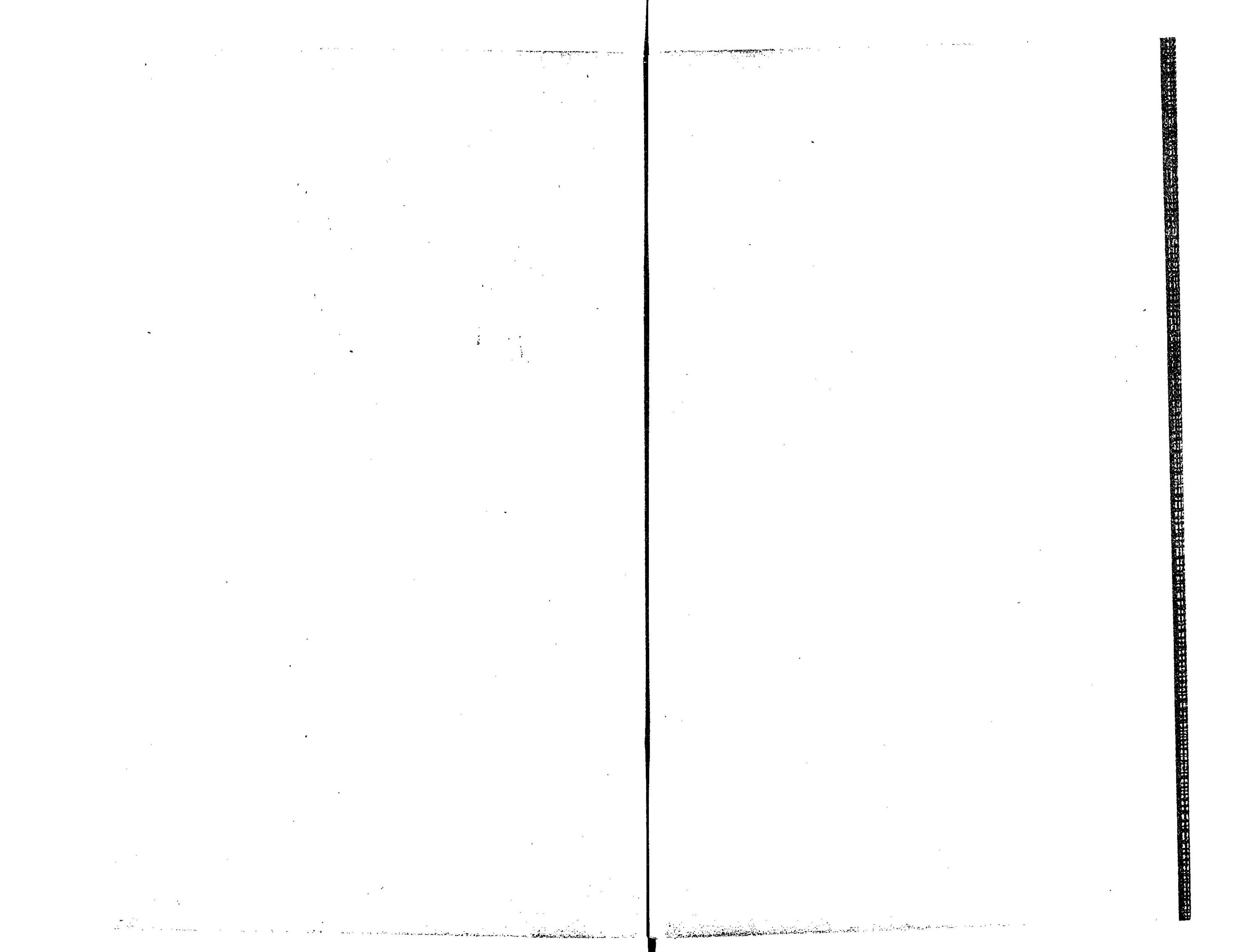


8



265  
109





法  
中  
傳  
息  
緒

博

明  
43. 6. 27  
丙交



己酉初夏

柳江題



月照

國臣作

花の都は秋はなほ

夕べ淋き風情なり

名は流れたる清氷や

落來る瀧の音羽山

秋の葉色の深むことに

散るや紅葉のちりりと

亂れゆく世の浪花はや

蘆の葉はつは繁へんか



猶世の為めに身をつて

盡て入つても筑紫瀉

波影の岸の波ならぬ

操をいつか深みどり

色も變らぬ青柳の

驛路を越つて香椎瀉

多田羅の橋を打渡り

千代の松原千代かけて

萬代かけて君が代の

千歳の松によそつ

神に歩みを箱崎の

社にかけり四ツ文字の

筆のまをよへ問はば

延喜の帝畏くも

御手をば下りませうつ

爰も昔は石畳

重ねし浪の

よそ昔も忘れど

恨み浦回の夕たすき

かけて歎くも憐れなり



濡衣塚のぬれごろも

我身に著たる心地せり

やがて博多の假住居

こゝも浪風をわがしく

又行く先は薩摩瀉

沖の小島にあらねど

心細くも都にて

誰かあはれと思ふらん

たよるは心筑紫瀉

一人の外に打ちあけて

語りふくも憂き枕

波路へたてし行道の

野間の關屋のせき舟に

せき止められて又船に

乗るまゆそれと夜やみに

ゆられくして行先は

黒の瀬戸名ゆうゆ

頓て鹿見島かこの鳥

翼縮めて潜みしが

又木枯に驚馬きて



日向を指して船出せし

日は神無月望の夜の

傾く月と諸とるに

照り輝きて曇りなき

身は大君のためにとて

茲に一人の薩摩人

如何なる縁先の世に

契りも深き船の沖

底の藻屑となりぬるを

乗合ふ人も船人も

權の霰の露程も

さりとば知らぬ白浪の

幸やわげど甲斐なき

猶東雲のあけ鳥

鳴より外はなかりけり



明治四十三年六月十日印刷  
全 四十三年六月二十五日發行

發行兼  
編輯人

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
有 村 彌 四 郎

印刷人

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
藤 井 護 三 郎  
電話東四五五九番

發行所兼

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
藤 井 改 進 堂  
長電話東二七〇番



265  
109



